

[試験紹介]

大豆の中耕・培土時追肥による増収効果の検討

本県における大豆の収量は、平成 13(2001)年産 (223 kg/10a) 以降減少が続いており、また、ここ数年は単収が 180 kg/10a を下回っています。大豆は生育後半に窒素を多く必要とするため、開花期の追肥が収量向上技術として有効とされています。しかし以下の理由から、開花期の追肥を実施する生産者は少ないのが現状です。

- ①最も暑い時期にあたるため作業が大変
- ②追肥の要否を判断する指標がない

そこで、中耕・培土と同時に追肥を行った場合の増収効果や、生育量（主茎長、葉色、NDVI 値等）と収量との関係を明らかにし、省力的で効果的な追肥技術を確立するための試験に取り組んでいます。



写真 中耕・培土時追肥の様子

(水稻研究室)

[試験紹介]

生食用ぶどうの低コスト垣根仕立て栽培法の確立

生食用ぶどうは非常に収益性が高いものの、果樹棚や農機の導入に係わる高額な初期投資や、栽培開始後 3～4 年間収益がないといった金銭的な負担があり、新規参入の障壁となっています。一方、醸造用ぶどうの垣根仕立て栽培に用いられるトレリス棚は、自作することが可能で、慣行の平棚と比較して 50%程度安価に設置できます。

そこで、生食用ぶどう栽培の低コスト化を目指し、垣根仕立て栽培法を用いて、樹形、列間距離等の違いが作業性、果実品質、収量性に及ぼす影響を調査しています。また、防除に使用する高額なスピードスプレーヤーの代わりに、より安価な垣根用防除機を試作し、実用性の検討も併せて行っています。



写真 1 平棚栽培（慣行）



写真 2 垣根仕立て栽培



写真 3 垣根用防除機

(果樹研究室)